

もの言う牧師のエッセー 第145話 「ジャスティン・ビーバーの洗礼」

宿泊先のオーストラリアのホテルで落書きしたり、過去の人種差別発言で“炎上”したり、市街地で酔っぱらって高級車でドラッグレースをして捕まったりと、何かと話題の多いジャスティン・ビーバーが、洗礼を受けたというニュースが6月頃に世界中を駆け巡った。が、つい最近も隣人宅に卵を投げつけたりと、全くろくでもない二十歳の若者だ。しかし一方で、「好きでもない女の子とはセックスするべきではない。」などと、やりたい放題のセックスには否定的な見方を示したり、3/11の東日本大震災の際には、他のアーティストらが“放射能汚染”を恐れて尻込みする中で、2ヶ月後の5月には東京にやって来て被災児童たちを慰めたりと、なかなか情に厚い男でもあるようだ。

さらに驚くべきことに、「僕はクリスチャン。神を信じるし、僕の罪のためにイエスが十字架で死なれたことを信じている。僕がここにいるのも彼がいるからこそなんだ。」などと発言して来たことは世界中に知られている。いったい全体彼は“いい人間”なのか何なのか。しかし、彼の頓珍漢な行動は、

「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。」ローマ人への手紙 10章9節、

と記されている聖書の言葉の意味を改めて考えさせられる。彼を見ての通り、クリスチャンとは“いい人間”なのではない。無論そうあるべきだし、信じた後にキリストが下さる聖霊の力でそうなっていくのは可能だが、問題は彼が言ったように「自分の罪のためにキリストが十字架で死なれたこと」を信じることだ。つまり彼は聖書の言うとおりの“救われた”のだ。

ビーバー君は若くて金持ちで有名なので、救われる必要などない、と誰もが感じるころであろうが、ここで言う救いとは、いわゆる助けとか癒しとかの類を越えるもので、ズバリ「死」からの救い、そして死後の裁きと地獄からの救いをさす。そう、彼のような不良でも、救われたら天国に行ける永遠の命を授かるのだ。何と“オイシイ話”なんだろうか。これを「福音/ゴスペル（良い話）」と呼び、人の人格や行動とは関係なく、キリストの恵みによって与えられるものである。そして、洗礼を受けて罪を洗い流したら何もかもOKではない。なぜならクリスチャンも引き続き罪を犯すし、それはなくなる。彼のように善と悪のせめぎ合いは毎日続く。頓珍漢な失敗もして

しまう。だが、キリストを救い主と信じる者は、神の恵みによる救いをもはや失うことはない。周囲の方々に迷惑をかけつつも、毎日神に感謝し、悔い改めつつ歩んで行く。お陰さまで、私も何とかクリスチャンをさせていただいている。キリストの愛に、ただ感謝である。

2014-7-27

